



# I'm happy if you are happy

たった今、協会誌12月号(2016年)のNYエッセイ、中瀬さんの“Just Do It.”の回を読んで、深い共感を覚えたので、思わずここに書かせていただいております。中瀬さんとは実際にお会いしたことはなく、エッセイの隣ページ越しにですが、昨年も大変お世話になりました。そして、たくさんの刺激をくださって、本当にありがとうございます。今年もどうぞよろしく願いいたします。彼女のエッセイを読むたびに、共感を覚えたり、ちょうどエッセイに書こうと思っていたジャンルのことが書かれていたり、住んでいる国は全く違うのに、なぜか近く感じてしまうのは私だけでしょうか。

中瀬さんのおっしゃるとおり、「舞台製作に携わるときにいつも思うのは、照明デザインは最後の甘いデザートのようなご褒美で、それに至るまでのマネジメント業務が仕事の大半です」というところに、とても共感を覚えしました。

照明デザインのマネージメントの中には、ペーパーワークやメールのやり取りなどのオフィス/自宅業務、そして、下見やり見学、ミーティングなどの下準備があり、これが仕事の大半です(もちろん、アシスタントやアソシエイト照明デザイナーがいるような、大スケールのプロダクションの場合は、話

は変わってきますが)。マネージメント業務でうまく捗らなかつたり、手こずって苦勞することがあったとしても、最後に照明デザインが納得のいくものになれば、それは素晴らしいご褒美であり、すべての苦勞が報われる瞬間です。

意味的には、マネージメント=管理・経営ですが、そのような作業的、業務的な部分ばかりだけではなく、重要なのは「人のマネージメント」だと最近よく思います。「人を管理する」というよりは、「人を理解する」というほうが正しいでしょうか。自分は照明デザインというお仕事は、少し見方を変えると、「中間管理職」でもあると思っています。中間管理職といいますが、課長や係長などの社会的地位という意味ではありません。いろいろな部署とのコラボレーションはもちろん、時には部署同士の中和剤の役割も果たしていると感じています。

中瀬さんのおっしゃるように、実際に仕込み日になって劇場に行ってみたら、前の公演の機材が完全にバラされていなかったり、注文した機材が時間通り届いていなかったり、劇場テックスペックに載っていた機材が今は紛失/故障して使えなかったりと、肝心な日に力抜けしてしまうようなことが続くこともあったりします。それらのほとん

どの問題は、演出家に言ってもしょうがないような技術的なこと。時間のプレッシャーの中、クリエイティブチームとテクニカルチーム、この2つの全く違う言語とスピードを使い/見分けながら、中間管理職をやり遂げる。その上で、自分の望む照明の完成度を上げていく。誰も自分を理解してくれないと、『実に孤独だ』と思ってしまうときもあります。よく見渡してみると、みんな同じような心境を通過しているのだなと思うことがあります(特にクリエイティブチーム)。エゴをどこまで貫き通すか。よい言い方をすれば、「信念を貫く」と言えるかもしれませんが、悪い言い方をすれば「エゴイスト」。「強い信念とアイデアがないのなら、デザイナーになる価値なし!」と言われる方もいらっしゃるかもしれませんが、やはりプロダクションはチームワーク、バランスは大事です。

「あなたが幸せなら、私も幸せ。I'm happy if you are happy. (だから、あなたの考えにしがたいでしょう。)」アイデアの話し合いなどで、議論の最後にまとまりがつかなかったり、妥協に走らざるをえないときは、この言葉を捨てることがあります。皮肉的表現を好んで使う人が多いと言われるイギリス人が、この言葉を笑顔で口にしたとき、それが皮肉的な意味なのか、そうではないのか、なかなかわかりにくいものがあります。自分も、時間がないときや、丸く収めなければいけないときは、たまにこの言葉を使いますが、言った後に後悔することもあります。

主張しなければならぬところは、もちろん主張します。自己満足とチーム満足の値があるとしたら、前記が上がりれば上がるほど、後記もそれと一緒に上昇していくというのが、理想的かもしれませんが。でも角度を変えてみたら、チーム満足度が上がるから、自己満足度も上がるという、I'm happy if everyone is happy (みんなが幸せなら、私も幸せ)というところに、最終的にはいつも行き着いている気がします。



よく一緒に働くデザイン&テクニカルチーム